群15名、下位群15名、中間位群の３群に分けて比較した。専門課程総合成績との間には有意の相関はないが、昭和61年度までの留年・退学率については有意の差が出る場合があった。昭和55年度入学者の場合のみは上位群は下位群よりその率が有意に低い。昭和54～56年度の率の合計では、上位群、中間位群、下位群の順に高率になる傾向が認められた。退学者は全員が中間位群からであった。医師国家試験合格率との関係では、３群の間に差はなかった。なお、興味深い報告であるが、小論文を課さなかった昭和53年度以前の入学者からは４名の自殺者が出たが、昭和54年度以降入学者については皆無であった。小論文との関係は不明であるが、検討を進めたいと報告している。滋賀医科大学も小論文成績と専門課程成績の間には有意な相関が認められなかったと報告している。

以上のほか、佐賀医科大学では出題の形式・内容を引き続き検討し、鳴門教育大学では小論文試験の在り方について調査を継続中である。

高校調査書

共通第１次学力試験による入試制度も年を経て、各大学における関係データも蓄積され、調査研究が充実の方向にある。このような状況の元で、高校調査書に記載された記録を基に新しい分析を行う例が増加している。以下に紹介するように、調査書と入試成績や、入学後の成績との関連のみならず、卒業後の資格試験合格率との関係など、今までの調査研究報告には見当たらなかったものもある。

高校調査書と入試成績

例年通り高校調査書成績と共通第１次学力試験成績、第２次学力検査成績との間での相関調査をいくつかの大学で行っているが、これに続く調査の一環として、あるいは相関係数を求めるのではなく入試成績を何人かの単位の序列で表し、成績概評別に各序列に含まれる人数を求めて、高校成績と入試成績との関連を、昭和54年度から61年度までの８年間をまとめて論じている例(宮崎医科)。入試成績との相関係数の信頼度を調査した例（滋賀医科）等があり、何れもある程度の相関が認められることを指摘している。

高校調査書成績と合格率

上の事柄から高校成績と合格率との関係が調査されることとなるが、当然高校成績がよいものほど大学への合格率は高い。前記宮崎医科大学では成績概評別合格率の８年間にわたる各階層毎の平均とその標準偏差を求めているが、標準偏差は大きくても５％程度である事を示している。同様の調査は東京医科歯科大学でも毎年

実施しているが、傾向は上記と同じである。その他、調査書評定平均値と合格率との関係を調査した例があり、合格率をｙ、評定平均値をｘとして、昭和58年度から61年度までの回帰直線を求めたところ年度の順にｙ＝24.99ｘ－82.86、ｙ＝24.51ｘ－62.58、ｙ＝28.99ｘ－72.95、ｙ＝31.22ｘ－81.30と、年を追って直線の傾きが急になっていることと、一高校からの合格者は最多でも約10名程度であることから、高校間格差があっても、入試成績からみた高校調査書の信頼性が高くなってきていると考えている(電気通信)。

高校調査書成績と入学後の成績

この調査も多数の大学で実施されていて、ほとんどの結果が入学試験成績と入学後の成績との相関よりもこちらの相関が高いことを指摘している。この中で茨城大学では学部あるいは学科別に種々の相関係数調査を行った結果、高校調査書との相関が高いことを示している。また北海道教育大学及び同大学の中村紘司らは、入試成績が平均以下で、かつ評定平均値が3.8以下の合格者の学内成績が不振であること、評定平均値が3.8以上の不合格者の中に同大学での学習が十分可能である者がいる可能性を指摘してきたが、今回も教科専門科目中８割以上が「優」の成績を修めた者の67％がある評定平均値を上回り、かつ調査書の行動及び性格の記録を数量化した値が大きいことを示している。特に後者の行動の記録に着目した調査研究は他大学からの報告にはない。

高校調査書成績と卒業時の成績・卒業率

これについては入学後の成績と同様のことが言えるが、何年かにわたって卒業生を送りだしたため標題のようなデータも揃ってきた。宮崎医科大学では上に述べた成績概評別の入学時の成績序列の外に、卒業時の成績序列の分布を概評別に求めた結果、入学時の成績序列分布よりもより明瞭に高校成績が上位の者が卒業成績も良いことを報告していて、３年間の概評別卒業率の平均も成績概評の良い者程高く、Ａで88.5％、Ａ：69.0％、Ｂ：53.2％、Ｃ：39.4％と明瞭に差が認められる事を示し、新潟大学においても卒業率と入学試験、特に第２次学力検査成績との間ではほとんど相関がなく、また共通第１次学力試験の国語との間では負の相関を示すこと、これに反し高校成績との相関が比較的高いと報告している。

高校単位での分析

一つの高等学校からの受験者や入学者が多数いる大学も少なくない、このような大学では高校単位での調査・分析が可能である。以前からいくつかの大学で調査されてきたが、今回もこの点に触れている報告がある。琉球大学では高校成績と学内成績との関係は出身高校によって多少の差があるものの、高校成績上位の者の学内成績が上位である割合はいわゆる進学高校でも地方高校でも大差はないとし、高校間格差はあるものの地方高校でも成績順位で上位の者は十分推薦入学の対象となり得ることを指摘して

いる。

また、受験者数が50名を越す高校毎に共通第1次学力試験成績により高校調査書評定平均値を補正し、これを用いて共通第1次学力試験成績との相関係数を求めたところ、もとの0.2が0.4と修正される事を示した例がある（北海道教育）。この他にも高校をいくつかのグループに分け共通第1次学力試験成績、第2次学力試験成績に関する諸統計量を算出することによって、高校グループ間に差のあることを指摘している報告もある。

医師国家試験との関連

高知医科大学では、調査書成績概評別・浪人回数別に3年間にわたって医師国家試験の不合格者の調査を行い、高校成績のよかった者ほど合格の可能性が高く、Aでは現役、浪人を問わず不合格者はいない。Aでも浪人歴数年以内ならば合格率は高いが、Bの場合は1浪でも不合格者が発生していることを示し、この面から高校調査書は信頼に値すると述べている。

その他

推薦入学者の高校成績の学科内での順位は高くなっているが、入学後の成績順位はほとんど全順位にわたって分布していることと、2次募集入学者の高校成績と入学後の成績との相関は学年が進むにつれて増加する傾向のあることを報告している例なども見受けられる。

他方、入学後の成績と入試成績との相関よりも、高校成績との相関が高いことを指摘する例が多いことについて、合格者の分布に関し、入試成績については下位が切除される結果相関が小さくなるが(選抜効果)、一方高校成績分布の切除は前者ほど規則的ではないため、選抜効果の影響は少なく、従って、これの評価に注意を要するとの指摘がある（高崎禎夫・広島）。

全般的には、高校調査書について高校長の責任ある評価を尊重し、大学入試の参考資料として重視したいと言う記述が見られ、高校との信頼関係の強化がより必要と感じられる。

選抜の諸方式

入試選抜には、(1)共通1次、2次試験の組合せによる一般入試方式、(2)推薦入学、(3)第2次募集(定員保留、欠員補充の両方を含む)、(4)帰国子女の特別選抜、(5)社会人の特別入試、(6)追加合格(昭和61年度には大きな問題となっていないが、昭和62年度には少なからぬ大学が実施している)などの方式があり、それらの入試実施の技術的な方法としては、(a)学力試験、(b)小論文、(c)面接、(d)実技、(e)高校調査書・推薦書、(f)2段階選抜などがあげられる。